

# 自己に関する概念の変化が視覚的注意の焦点の範囲を調節する

小林 穂波

関西学院大学 文学部

小川 洋和

関西学院大学 文学部

他者との関係性に基づく自己観の変化が、さまざまな認知処理に影響を及ぼすことが示されている。しかし、視覚的注意への影響については十分な検討がなされていない。本研究の目的は、自己観の変化が視覚的注意の焦点の大きさを調節するかを明らかにすることであった。自己観を操作する課題を実施する前後でフランカー課題を実施し、課題非関連刺激からの認知的干渉の効果量の変化を測定した。さらに、課題標的と課題非関連刺激との空間的距離を操作し、自己観の操作によって視覚的注意の焦点の大きさがどのように変化するかを検討した。その結果、相互協調的自己観を活性化した参加者は相互独立的自己観を活性化した参加者に比べて、標的に近接する課題非関連刺激からの干渉が大きくなった。この結果は、自己観の変化によって視覚的注意の焦点の大きさが調節されることを示している。

Keywords: self-construal, attentional spotlight

## 問題・目的

他者との関係性に基づく自分に関する考え方を自己観と呼び、関係性に重きを置く相互協調的自己観と、自分自身に焦点を当てる相互独立的自己観に分類できる (Markus & Kitayama, 1991)。これまでの研究では、自己観を実験的に操作することで、自己観が全体・部分処理や記憶といった高次認知処理に影響を及ぼすことが示されてきた (Oyserman & Lee, 2008)。

一方で、自己観が視覚的注意による情報選択にどのような影響を及ぼすかについては十分な検討がなされていない。Lin & Han (2009) は参加者の自己観を活性化するプライミング課題を用いて、プライミング後の視覚的注意の焦点の範囲の変化をフランカー課題で検討した。その結果、相互協調的自己観をプライミングした群は、相互独立的自己観をプライミングした群よりも視覚的注意の焦点の範囲が広がったことが示唆された。ただし、この研究では相互独立的自己観が視覚的注意の焦点の範囲に与える影響については検討できていない。視覚的注意の焦点の範囲はおおよそ視角1度であるといわれているが (Eriksen & Eriksen, 1974)、自己観によって焦点の範囲がどの程度変化したのかを具体的に測定することはできていない。

本研究は、自己観が視覚的注意の焦点の範囲をどのように変化させるかを検討することを目的として実施した。そのために Lin & Han (2009) と同様に自己観のプライミング課題を実施し、課題前後のフランカー課題の成績を比較した。本研究の仮説は、相互協調的自己観を活性化させることで注意の焦点の範囲が広がる一方で、相互独立的自

己観の活性化によって焦点の範囲が狭くなるということであった。もしこの仮説が正しければ、相互協調的自己観のプライミング課題後のフランカー課題における近接妨害刺激からの干渉が、相互独立的自己観のプライミング課題後と比べて大きくなることが予測される。

## 方法

**参加者:** 関西学院大学の学生 47 名 (実験 1: 23 名、実験 2: 24 名) が参加した。

**手続き:** 参加者は自己観のプライミング課題の前後にフランカー課題を 1 セッションずつ行った。自己観のプライミング課題では、集団または個人で目的を達成しようとする状況を想像する課題と、家族や友人との類似点または相違点を書き出す課題を実施した。フランカー課題における参加者の課題は、横に並んで呈示される 5 つの矢印のうち、標的刺激である中央の矢印が右向きか左向きかをキー押しで反応することであった。両脇に呈示される矢印、すなわちフランカー刺激が中央のものと同じ向きである一致条件と、違う向きである不一致条件があった。実験 1 では、標的刺激とフランカー刺激間の距離は固定であった。実験 2 では、注意の焦点の範囲が変化したかを調べるため、標的刺激とフランカー刺激間の距離を 4 種類設定した。プライミング課題の種類 (相互協調・相互独立) を参加者間要因、フランカー刺激と標的刺激の一致性および刺激間距離を参加者内要因として実験を実施した。

## 結果

**実験1:** 相互独立的自己観をプライミングした群におけるフランカー刺激からの干渉量が、プライミング課題前と比較して小さくなっていることが示唆された。分析は線形混合モデルによって実施し、参加者を変量効果として扱った。フランカー課題における干渉量の変化を Figure 1 に示す。相互独立的自己観をプライミングした群において、プライミング課題後のフランカー干渉量が、課題前に比べて小さくなった ( $b = 21.57, SE = 10.54, t = 2.05$ )。

**実験2:** 相互協調的自己観をプライミングした群における注意の焦点の範囲が、相互独立的自己観をプライミングした群に比べて大きくなっていることがわかった。分析は参加者を変量効果とした線形混合モデルを用いて実施し、プライミング課題前のフランカー干渉量を共変量として、プライミング課題後のフランカー干渉量を比較した。Figure 2 に刺激間距離の増加に伴う干渉量の変化を示す。また、刺激間距離とプライミングの種類に関する各条件間のペアワイズ比較をおこなった。まず、相互協調的自己観をプライミングした群では、刺激間距離が大きくなってもフランカー干渉量は減少しなかった。一方で相互独立的自己観をプライミングした群では、刺激間距離が視角 0.22 度のときよりも 0.55 度のときにフランカー干渉量が小さくなり ( $b = 15.97, SE = 6.68, t = 2.39$ )、その後は刺激間距離がさらに広がっても干渉量は減少しなかった。

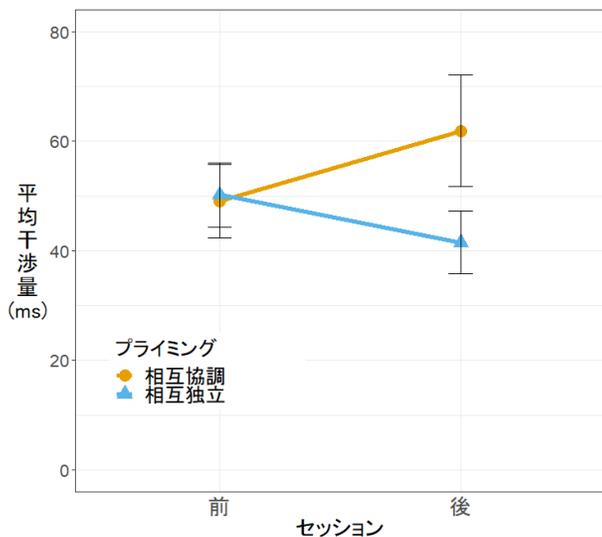


Figure 1. 実験1のフランカー干渉量(一致条件と不一致条件の平均反応時間の差)の平均値

## 考察

本研究では、自己観の活性化に伴う視覚的注意の焦点の範囲への影響について検討した。実験1の結果から、相互独立的自己観の活性化によって注意の焦点の範囲が小さくなることが示された。実験2では刺激間距離を複数設定することで、注意の焦点の範囲を測定した。その結果、相互独立的自己観のプライミングによって注意の焦点の範囲がおよそ視角 0.55 度程度まで狭くなる可能性が示唆された。一方で相互協調的自己観では今回設定した距離よりもさらに広い範囲に視覚的注意の焦点が広がっている可能性が示された。以上より、自己観が視覚的注意のスポットライトの大きさを調節する過程に影響を及ぼすことがわかった。

## 引用文献

- Eriksen, B. A., & Eriksen, C. W. (1974). Effects of noise letters upon identification of a target letter in a non-search task. *Perception & Psychophysics*, 16, 143-149.
- Lin, Z., & Han, S. (2009). Self-construal priming modulates the scope of visual attention. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 62, 802-813.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Oyserman, D., & Lee, S. W. (2008). Does culture influence what and how we think? Effects of priming individualism and collectivism. *Psychonomic Bulletin*, 134, 311-42.

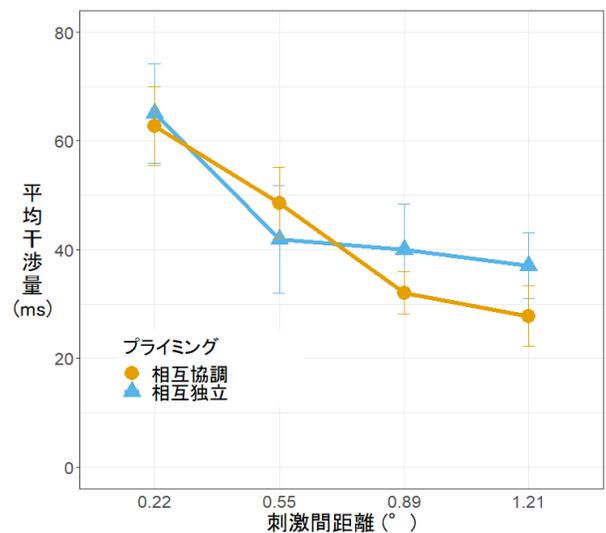


Figure 2. 実験2における各条件のフランカー干渉量の平均値